

英語における間接使役構文の動機づけ

長谷川 明香

キーワード

間接使役構文、道具主語構文、使役、因果連鎖、Agent

要旨

本稿では、*Nixon bombed Hanoi* や *John built a new house* のような、動詞句が通常表わす行為を実際に行なう人（以下 Actor）ではなく、その人がその行為を行なうように命令・依頼した人（以下 Indirect Causer）が主語になっている非典型的な語彙的使役構文（本稿では「間接使役構文」と呼ぶ）を取り上げて、その成立背景を探る。間接使役構文の表わす事象には以下の特徴が観察される。

1. Indirect Causer が Actor に働きかけない限り、その行為が実現しない。
2. Indirect Causer が行為の実現を意図し（社会的慣習などに従って）Actor に働きかけさえすれば、行為は抵抗なく（ほぼ自動的に）遂行される。

このことから、本稿では、間接使役構文の主語の選択が、この構文と結びついた以下のような捉え方によって動機づけられていると主張する。

- i. Indirect Causer が、行為実現に対する意図および責任の主体である面が焦点化され、(Actor を差し置いて) 行為の主体として捉えられている。
- ii. Actor は、Indirect Causer が行為を遂行するための手足や道具に相当するものとして捉えられるため、その存在は因果連鎖において捨象されている（典型的な語彙的使役構文における道具 (Instrument) と同様の捉え方が適用されている）。

1. はじめに

語彙的な使役構文（使役の形態素を伴わない単純な他動詞を用いて使役の意味を表わす構文）は、典型的に、主語（で表わされたもの）が目的語（で表わされたもの）に対して意図的かつ自発的に自分の身体を動かして直接働きかけ、その結果、目的語が主語の意図通りの変化を被る事象を表わすと言われる。¹ また、動詞句で表わされた行為の実現は主語によってなされたと解釈される。(1) は典型的な語彙的使役構文の例である。

(1) John opened the window (because it was hot). cf. 太郎は(暑かったので)窓を開けた。

それに対し、主語が行為を行なった人ではなく、行為実現を意図し実際にその行為を行なう人に命令・依頼する人である場合の (2) は、上記の典型から逸脱している。

¹ 本稿は、Hasegawa (2010) の一部を、大幅に増補改訂したものである。

(2) Nixon bombed Hanoi. (Lakoff and Johnson 2003[1980]: 38)

cf. 聖徳太子が法隆寺を建てた。

この種の構文を、主語が間接的に行為実現に貢献しているという点に着目して、本稿では暫定的に「間接使役構文」と名付ける。² (2) に挙げた *Nixon bombed Hanoi* には、主語が動詞句で表わされた行為を実際に行なっている場合とそうでない場合の二通りの解釈があるが、本稿で「間接使役構文」と呼ぶものの意味は、後者の解釈にあたる。すなわち、動詞句で表わされた行為を実際に行なっているのは主語とは異なる人で、主語は、実際の行為者に対して命令なり依頼なりをした人であるという解釈である。

英語の間接使役構文に関して、構文全体の意味を考えるとともに、なぜ非典型的な主語が可能なのかという問題に対する答えを与えることが、本稿の目的である。なお、これまでいくつかの先行研究 (Ikegami (1982) など) が指摘しているように、英語より日本語の方が、間接使役構文として表現できる事態の範囲が広い。本稿では主に英語について論じるが、本稿で扱った限りの英語の間接使役構文を日本語に逐語訳したのも、間接使役構文として解釈することが可能であり、このことから日本語の場合にも同様の原理が働いていると考えられる。

2. 間接使役構文の意味

以下の例文は、間接使役構文として解釈できるものである。

- (3) a. Nixon bombed Hanoi. (= (2))
b. John built a new house. (Ikegami 1982: 96)
c. John repaired his watch. (Ikegami 1982: 96)

今後の議論では、主語の意味役割を Indirect Causer、動詞句で表わされる行為を実際に行なっているものを Actor、目的語の意味役割を Patient と呼ぶ。この三者の客観的な関係を因果連鎖の形で図示すると以下のようなになる (主語は二重線で示す)。



図 1

(3a) を例にすると、大統領である *Nixon* (Indirect Causer) の命令に従って実際の行為者

² 「間接使役」は、*make* や *let*、「(さ)せる」などの使役 (助) 動詞を用いた迂言的 (文法的) な使役表現の意味で使われることもあるが、本稿では Ikegami (1982) の *indirect causation* にならない、(2) のような構文に対して「間接使役」という用語をあてる。尚、日本語学で「介在性構文」「介在使役構文」などと呼ばれるものにおおまかに対応する (許 (2006)、澤田 (2008) などを参照)。

(Actor) が *Hanoi* (Patient) を爆撃することをこの図で表わしていることになる。³

Lakoff and Johnson (2003 [1980]: 39) は、実際に行為を行なった Actor ではなく Indirect Causer が主語になっている点に着目し、このような現象を CONTROLLER FOR CONTROLLED metonymy と名付けた。この名に現れているように、実際に行為を行なっている人は、主語に control されている。そして、主語 (Indirect Causer) は、実際に行為は行なっていないとも行為実現の主体とみなされ、その行為に対して責任をもつことになる。とされる。

Ikegami (1982) は、間接使役構文の特徴として、technical difficulty (動詞句で表わされた行為が技術的に難しいこと) と authority (主語に権威があること) を挙げている。(4)(5) において、b よりも a が間接使役構文として解釈されやすいのは、それぞれ技術的困難さと権威性によると説明している。

(4) a. I fitted my glasses.

b. I fixed my glasses. (a,b 共に Ikegami 1982: 98)

(5) a. The President of the University painted the tower brown. (Ikegami 1982: 99)

b. John painted the room white. (Ikegami 1982: 98)

3. 分析:間接使役構文の主語の動機づけ

本節では、先行研究で提案された間接使役構文のいくつかの特徴を関連づけ、更に、どうして実際に行為を行っていない者が主語に立っているのかという問題に対して、明確な理由付けを与えたい。

3.1 道具主語構文との比較

間接使役構文を考える上で示唆に富む「道具主語構文」を取り上げる。なぜなら、間接使役構文と道具主語構文とは、主語の選択に関して興味深い対称性を示すからである。道具主語構文とは、例えば以下のような文である。

(6) a. This key opened the door.

b. Poison killed Jane. (Nishimura 1993: 490)

c. The hammer (easily) broke the glass. (Langacker 1990: 216)

d. This pencil draws very thin lines. (Schlesinger 1989: 191)

道具主語構文の主語は、無生物であり意図性をもつ存在ではない。その道具をある人が使い動詞句で表わされた行為を行なっている状況に対して適用される。⁴ すなわち、言語化されていなくても必ずその道具を使い行為を行なう Agent が存在する。これを図示すると、下

³ 同じ状況に対して、Actor を主語にして *The pilots bombed Hanoi.* と言うことも可能である (西村 1990: 63)。

⁴ 道具が意図をもって行動する場合 (例、物語で鍵が自分の力で動き鍵穴に入る状況) などは、除外する。

記のようになる（ここでは、実際に道具を使っている者を Agent、道具を Instrument、変化を被る対象を Patient とする）。



図 2

また、同じ状況に対して、*I opened the door (with this key)* のように Agent を主語にした構文（以下、「Agent 主語構文」と仮称）を使うことも可能である（そちらの方が、本稿の冒頭に述べた意味で、使役構文の典型である）。この場合は、以下のように図示できるだろう。

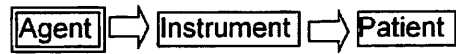


図 3

ここまで取り上げた構文を並べると、以下のようになる。4 段目の Actor 主語構文についてはここまで明示的に述べていなかったが、間接使役構文が表わすのと同じ状況について Actor を主語にして述べたものである。ここでは操縦士 *the pilots* が Actor であると考えている。

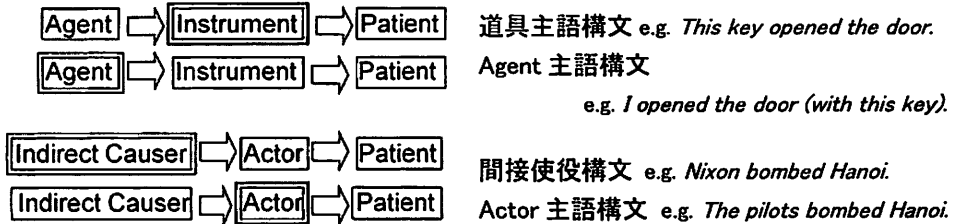


図 4

ここでまず注目すべきは、上の 2 つ——道具主語構文と Agent 主語構文——の関係と、下の 2 つ——Actor 主語構文と間接使役構文——の関係が、因果連鎖における主語の選択に関して対称的になっていることである。道具主語構文では、実際に道具を使って行為を行なっている Agent ではなく、行為の単なる「媒介者」とでもいふべき Instrument が主語になっている。対して、間接使役構文では、実際に行為を行なっている Actor ではなくそれに働きかけて行為を行なわせている Indirect Causer が主語になっている。⁵

そもそもどうして道具主語構文においては、Agent をさしおいて Instrument が主語に立てるのだろうか。道具主語構文の場合は「その道具を使ったからこそ動詞句が含意する変化

⁵ このように考えると、道具主語構文は、CONTROLLED FOR CONTROLLER metonymy と言えるだろう。

が引き起こされた」という解釈が前面に出る。このような解釈では、Instrument は、変化の直接的な原因であり変化の引き起こし手であるという点で典型的な Agent と共通していると言える。この構文において、Instrument が主語として表現されているのは Agent として再カテゴリー化されるからであると考えられる。⁶ 逆に、典型的な使役構文と言える Agent 主語構文の場合は、動詞句が含意する変化の実現を意図し道具を使いその変化をもたらした者である Agent とその行為に焦点が当てられている。この捉え方では、Instrument は単なる媒介者に過ぎず、項として現れない。

図 4 に示した対称性を利用して、間接使役構文を再び考える。Agent 主語構文が、間接使役構文と同じ因果連鎖の図式にあてはまることが示唆的だからである。間接使役構文では、実際に行為を行なう Actor がいるものの、それが Agent 主語構文における Instrument のように、媒介者として捉えられており、同時に、Indirect Causer が Agent に相当するものとみなされていると考えることは、そう無理な解釈ではないだろう。典型的な使役構文である Agent 主語構文で Agent が主語に選択されるのとはほぼ同じ理由で、Indirect Causer が主語として選択されている。すなわち、Indirect Causer が Agent として再カテゴリー化されることで、それが主語に立つことができるのである。事実、動詞句で表わされた行為の実現を意図し、その行為に対して究極的な責任を負っている (Lakoff and Johnson 2003 [1980]: 39) という点に、間接使役構文の Indirect Causer と、使役構文の典型的な主語である Agent との共通性が見いだせる。加えて、実際に動作を行なっている Actor は、その意図性を捨象されることによって、Indirect Causer の単なる道具・手足のような (Agent 主語構文における Instrument に相当する) ものとして捉えられていると言える。⁷

間接使役構文において権威ある者が主語である場合が多い (Ikegami (1982) の指摘する authority) という点は、特権的な地位にある者の方が、そうでない者より、実際には主体性のある人間 (Actor) を意のままに動かしやすいという百科事典的な知識に基づいていると思われる。技術的に困難な作業 (Ikegami (1982) の指摘する technical difficulty) の多くには、それらを行なう専門家がいる。ある種の専門家 (軍隊、家来など) に命令・依頼し希望通りに作業を行なってもらえる (あたかも自分の手足・道具のように扱える) のは、権威のある特権的な地位にいる者のみなのである。

3.2 間接使役構文に反映されている話者の捉え方

3.1 において、間接使役構文における Indirect Causer が、(道具主語構文に対応する) Agent 主語構文における Agent に相当するものであると述べたが、その点について考察を進める。

Talmy (2000) が、*I'm going to clean my suit at the dry-cleaning store on the corner* のような、本稿で言う間接使役構文を取り上げて、以下の興味深い指摘をしている。

[T]o the extent that material referring to such intermediary agents is gapped from a sentence, the intentions, volitional acts, and effects of these agents are attentionally backgrounded, conceptually neglected, and thereby rendered causally “transparent” – that is, subject to the

⁶ Schlesinger (1989)、Nishimura (1993)、Hasegawa (2010)などを参照。

⁷ これとほぼ同じのことが西村 (1990) において既に指摘されている。なお、許 (2006) の「道具的存在」も同様の趣旨のものであると思われる。

conception of causal continuity progressing directly through such agents rather than stopping at each agent and being renewed by a fresh act of intention and volition. (Talmy 2000: 274)

間接使役構文において感じられる主語と目的語の直接的関わりというのは、典型的な使役構文においてより明確な形で観察されるものである。Pinker (2007) に以下の記述がある。引用中の *Bobbie boiled the egg* が典型的使役構文、*Henry Ford made cars*、*Bush invaded Iraq* が間接使役構文にあたる。

For the [lexical] causative construction [(e.g. *Bobbie boiled the egg*)] to apply, the causation has to be effected with your bare hands, so to speak, or as directly as one billiard ball clacking into another. [...] The grain size of the mind's view of the world is adjustable. From a bird's-eye view, we can say that *Henry Ford made cars* or *Bush invaded Iraq*, though the causal chain between anything that Ford did and a Model T rolling off the assembly line had many intervening links. (Pinker 2007: 67-68)

Pinker (2007) によると、典型的な使役構文と間接使役構文との違いは、(使役的) 事態を捉える際に適用される grain size の違いということである。我々は grain size を調整することによって、因果連鎖のある部分を選択 (しそれ以外の部分を背景化/透明化) することができる。間接使役構文の場合は、因果連鎖を大きな grain size で捉えており、それによって Indirect Causer がまさに Patient に対して直接働きかけるという解釈が導き出されることになる。

確かに、図1で述べたように、Indirect Causer ⇒ Actor ⇒ Patient という因果連鎖が現実の状況には存在する。しかしながら、ここに grain size という話者の捉え方を導入することで、我々は、その因果連鎖を選択したりそこに変更を加えたりすることができるのである。大きな grain size で (鳥瞰図的に) 捉えることで、実際の状況に存在する媒介者 (Actor) とその意図および行為が捨象され (gap され)、主語である Indirect Causer が目的語である Patient へ直接的に働きかけているものとして、事態が再カテゴリーされていると言える。

このことを図示すると図5のようになる。(i) は図1を改訂したものである。途中に存在する Actor が捨象されていることを括弧で示した。これが Talmy (2000) の gapping に対応する。(ii) のように書き換え Indirect Causer から Patient への直接の矢印を引いて示してもよいだろう。

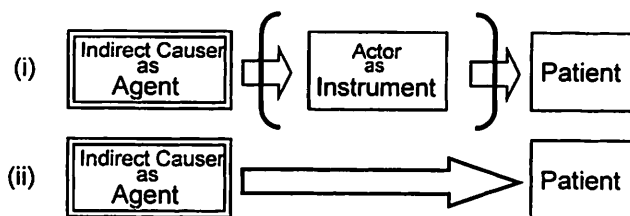


図5

典型的な使役構文の表わす状況と間接使役構文の表わす状況が実際には異なるものの、「主語＋動詞＋目的語」という同じ型で表現されるのは、どちらの状況にも「主語から目的語への直接の働きかけ」という同じ捉え方の枠組みが適用できるからである。

Talmy (2000: 274-275) では、以下の三つの例文における再帰代名詞と通常の人称代名詞の適格性も対比されている。

- (7) a. The Pharaoh built a pyramid for himself/*him.
 b. The Pharaoh had a pyramid built for himself/him.
 c. The Pharaoh had his subjects build a pyramid for *himself/him.
 (a-c 全て Talmy 2000 : 275)

主語の *the Pharaoh* を *himself/him* のどちらの代名詞で受けるかという問題であるが、間接使役構文である (7a) の場合、ピラミッドを建設したことがまさに *the Pharaoh* (Indirect Causer) 自身の行為であると解釈されることが、再帰代名詞の使用に反映されている。他者 (Actor) に行なってもらったことを明示しているが誰であるかは述べていない (7b) の場合は、*himself/him* どちらも可能になり、Actor である *his subjects* を明示した (7c) の場合には、*himself* は不可能となる。

ここで、間接使役構文において Indirect Causer が Agent として捉えられていること、Actor の意志が無視されていることを支持する指摘を一つ示す。久野・高見 (2005) では、以下の、間接使役構文 (8a) と make 使役構文 (8b) の違いを「抵抗」「強制」の有無に求めている。⁸

- (8) a. The traffic officer stopped the car. 「交通整理の警官は、その車を止めた。」
 b. The traffic officer made the car stop. 「交通整理の警官は、その車を止まらせた。」

久野・高見によると、(8a) は警官が手をあげストップサインを出して車が止まったと普通解釈され、他方 (8b) は、車が止まろうとしなかったのを警官が警笛を吹いたり運転手をどなりつけたりして止まるようにしたと解釈されるのが普通である。つまり、make 使役構文は、*the car stop* の表わす事象「車が止まること」が起こるのに抵抗があり、使役主 *the traffic officer* が強制的手段を用いてその事象を発生させると解される (久野・高見 2005: 138-139)。この観察を利用して、(8a) は、警官からの働きかけによって車が止まるという事象がスムーズに生み出されたという捉え方を表わしていると考えられるだろう。この指摘は、間接使役構文と結びついている解釈においては、因果連鎖の途中に存在する Actor の意志が無視され Indirect Causer が Patient へ意図的に直接働きかけたことによって Patient が変化を被ったのであるという本稿の主張に通じる。

⁸ (8a) は、車を実際に止めたのはブレーキを押した運転手であるという意味で、間接使役構文であると考えられる。

3.3 間接使役構文において表現されている事態の特徴

間接使役構文で表わされている事態の特徴をさらに踏み込んで考察するため、例文に即して実際の状況を考えてみる。

例えば、(3a) *Nixon bombed Hanoi* において、Indirect Causer がその行為の実現を意図し、Actor に命令するだけで、もうあとは行為が自動的に遂行されるといっても過言ではない。(3b) *John built a new house* のような場合においても、命令ではなく依頼という形態になり Actor がそれを了承するという過程が含まれるが、大枠は同じことである。Actor は実際に行為を行なっているとはいえ、Indirect Causer の命令・依頼がなければ、その行為は行なわない。更に、Actor は一旦 Indirect Causer からの働きかけを受け入れればもう選択の余地はないとまで言える。

選択の余地がないとは、言い換えれば、「命令を受けたら（もしくは、依頼を受け了承したら）その内容を実行しなくてはいけない」という取り決めや社会的慣習が存在しているということである。この意味で、命令・依頼（+了承）の時点で行為の達成は約束され、あとは自動的に物事が進むと考えてよい。(3a) の場合は明らかにそうであるが、(3b) の場合であっても、(技術的問題のない範囲内という制限はあるが) 契約を結んだ後は、John の希望通りに大工は家を建てることになる。Actor の意志は、Indirect Causer の意志をそのまま引き継いだものであり、Actor 独自の意志は無視されている。⁹ この点で Actor は Agent 主語構文の Instrument と同じ存在であり、裏返せば、Agent 性が Indirect Causer の方に見いだせることになる。このことが、Indirect Causer が主語に立つことを動機づけていると言える。

このように考えると、間接使役構文と Agent 主語構文との差は、かなり小さなものになってくる。明らかにどちらかに属していると言える例もある一方で、微妙な事例もある。(9a) との関連で (9b) について考えたい。

(9) a. This computer calculated pi to 3 trillion decimal digits.

b. He calculated pi to 3 trillion decimal digits with this computer.

一見、(9a) は道具主語構文、(9b) は Agent 主語構文として分析されそうな文である。しかし、状況を考えると、構文の種類がそう簡単に決定できないことがわかる。(9) が表わしているのは、彼がただキーを押してコンピュータに円周率を計算させているだけという

⁹ DeLancey (1984: 207) が述べている unified control に相当するものと思われる。DeLancey (1984) は、典型的な他動的な事象の中に存在する Instrument (すなわち Agent 主語構文における Instrument) について考え、以下のように述べている。

The behavior of instrumentals and clauses containing them is consistent with a description of the prototypical transitive event as involving *unified control*. An instrument does not count as a mediating cause because it makes no independent contribution to the event – it functions only as an extension of the agent's will. ... [T]he prototypical transitive event is one which can be traced back to a single cause from which an unbroken chain of control leads to the effect. (1984: 207)

間接使役構文についての言及ではないが、Actor が Instrument 的特徴を持っていることはこれまで議論してきた通りである。間接使役構文が表わす捉え方において、Actor は、Agent の意志の延長 (道具・手足のような存在) としてしか機能しておらず、事態の成立に対して独自の貢献をしていない。Indirect Causer の control を Actor がそのまま継承した形で Patient への働きかけがなされている。

状況である。このような場合、実際に計算しているのは道具であるコンピュータであると言えるので、(9b) を Agent 主語構文ではなく、間接使役構文とも言いたくなる ((9a) についても同じように考え、道具主語構文ではなく、Agent 主語構文だとも言う可能性も出てくるだろう)。このことから、Agent 主語構文と間接使役構文 (、および道具主語構文) との間に厳密な境界線を引くことが非常に困難であるということが、強く示唆されるであろう。

本稿では、Agent 主語構文と間接使役構文の共通点として直接性を提案してきた。最後に、どちらの構文であっても、同じように感じられる直接性というものについて、野矢 (1999a) の議論を引用しながらもう少し述べておきたい。(9) の例文が示す状況において、「彼」he は自分の頭を使ってうんうんと考えていなくてもコンピュータに最初の命令を打ち込みコンピュータが計算している状況であれば「彼は円周率を計算中である」と言うことができる。これは、野矢 (1999a: 65) の言う「結果待ちの間の進行形」である。以下、野矢の例に即して説明する。私が洗濯機のボタンを押し、その結果、今、洗濯機が作動して私は新聞を読んでいる状況において、「私は洗濯をしながら新聞を読んでいる」と言うことができる。あるいは、大豆を蒸して納豆菌をかけて置いておいた状況でも「いま納豆を作っているんだ」と言うことができる。確かに私はただ納豆菌を振りかけた後は、蒸し大豆を置いたままで待っているだけでよい。しかし、例えば、それが生ゴミとして捨てられそうになれば制止するであろうし、発酵が進まない場合には温度を上げるなどの工夫をする。現実には確かに洗濯や発酵が終わるのを待っているだけだが、「可能的には忙しい」のである。

この野矢の指摘する「結果待ちの間の進行形」「可能的忙しさ」は、道具主語構文に対応する Agent 主語構文だけでなく、(コンピュータの例を介して) 間接使役構文にも適用できるものである。すなわち、Indirect Causer も動詞句で表わされた事象の実現に対して、ずっと責任を負い、ずっと気にかけて、その意味においてその行為をずっと行なっていると言えるのである。この意味でも、Indirect Causer は Actor に働きかけるだけでなく、Patient に対しても直接的に働きかけ (続け) ていると言えるのである。

4. 結論と残された課題

本稿では、間接使役構文の特徴を述べたのち、Indirect Causer が主語として表現される動機づけの解明を試みた。間接使役構文で表現されている事態は、Indirect Causer が動詞句で表わされた行為の実現を意図し (社会的慣習などに従って) Actor に命令・依頼し (Actor がそれを了承し) さえすれば、その行為はほぼ自動的に遂行されるものである。この意味で、Actor の存在は捨象され、Indirect Causer の意図的行為として事態が再カテゴリー化される。Indirect Causer が Agent として再カテゴリー化されることが、それが主語に立つ動機づけになっていると考えられる。

今後は、本稿で主張した動機づけが妥当であるか、例を増やして検討を重ねる必要がある。本稿で直接的に論じられなかった責任性や話題性などの観点も取り入れ、使役構文全体の中での位置づけを明らかにしたい。また、本稿で述べた「捨象」「背景化」「再カテゴリー化」といった概念について、認知的な観点からその仕組みを探り、本稿の主張を修正・発展させていくことが望まれる。

引用文献

- 許永新. 2006. 「日本語における介在性構文と Actor の脱焦点化」『東京大学言語学論集』第 25 号. 東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室. 299-315.
- 久野暲・高見健一 (2005) 『謎解きの英文法 文の意味』. くろしお出版.
- 澤田淳. 2008. 「日本語の介在使役構文をめぐって」『言葉と認知のメカニズム』. ひつじ書房. 61-73.
- 西村義樹. 1990. 「認知言語学序説－意味論の可能性 (I)」『実践女子大学文学部紀要』第 32 集. 47-68.
- 野矢茂樹. 1999a. 「行為とできごとに関するいくつかの所見」『哲学・科学史論叢』第 1 号. 東京大学教養学部哲学・科学史部会. 39-78.
- . 1999b. 『哲学・航海日誌』春秋社.
- DeLancey, Scott. 1984. Notes on agentivity and causation. *Studies in Language* 8.2. 181-213.
- Hasegawa, Sayaka. 2010. A figurative approach to non-prototypical agents. 『杏林大学研究報告 教養部門』第 27 卷. 杏林大学. 109-118.
- Ikegami, Yoshihiko. 1982. 'Indirect causation' and 'de-agentivization'. *Proceedings of the Department of Foreign Languages, College of General Education, University of Tokyo*. Vol. 29, No.3. 95-112.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 2003² [1980¹]. *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald. W. 1990. *Concept, image, and symbol*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Nishimura, Yoshiki. 1993. Agentivity in cognitive grammar. In Geiger, Richard. A, and Brygida. Rudzka-Ostyn eds., *Conceptualizations and mental processing in language*. Berlin: Mouton de Gruyter. 487-530.
- Pinker, Steven. 2007. *The stuff of thought*. New York: Viking.
- Schlesinger, I. M. 1989. Instruments as agents. *Journal of Linguistics* 25. 189-210.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics* 1. Cambridge, MA: MIT Press.

Motivation for the Indirect Causative Construction (Indirect Causation) in English

HASEGAWA Sayaka

Keywords

the Indirect Causative Construction (Indirect Causation),
the Instrument Subject Construction, causation, causal chain, Agent

Abstract

This paper is an attempt to make sense of a seemingly peculiar use of the English lexical causative construction (e.g. *Nixon bombed Hanoi* or *John built a new house*), where the subject refers not to the party (hereafter "the actor") who actually performs the action typically denoted by the verb phrase but to the person (hereafter "the indirect causer") who orders or requests that the actor do so. Among the characteristics of the kind of situation to which this nonprototypical use (called in this paper "the Indirect Causative Construction") applies are:

1. The actor would not perform the relevant action without the indirect causer's order or request to do so.

2. As long as the indirect causer intends for the actor to perform the action and then acts on him/her according to some conventions, the action will take place of its own accord, as it were.

Based on these observations, it is argued that the choice of subject in the Indirect Causative Construction is motivated by the construal associated with it, which can be characterized as follows:

i. The indirect causer, rather than the actor, is taken to be the locus where the original intention for the action and the primary responsibility for its consequences reside, and is accordingly cast as the performer of the action at the expense of the actor.

ii. Regarded only as a means for the indirect causer to perform the action, the actor functions not as a mediating cause, but rather as an extension of the indirect causer's will. (This makes the role played by the actor in this construal comparable to how the instrument is viewed in the prototypical use of the lexical causative construction.)

(はせがわ・さやか 東京大学大学院)